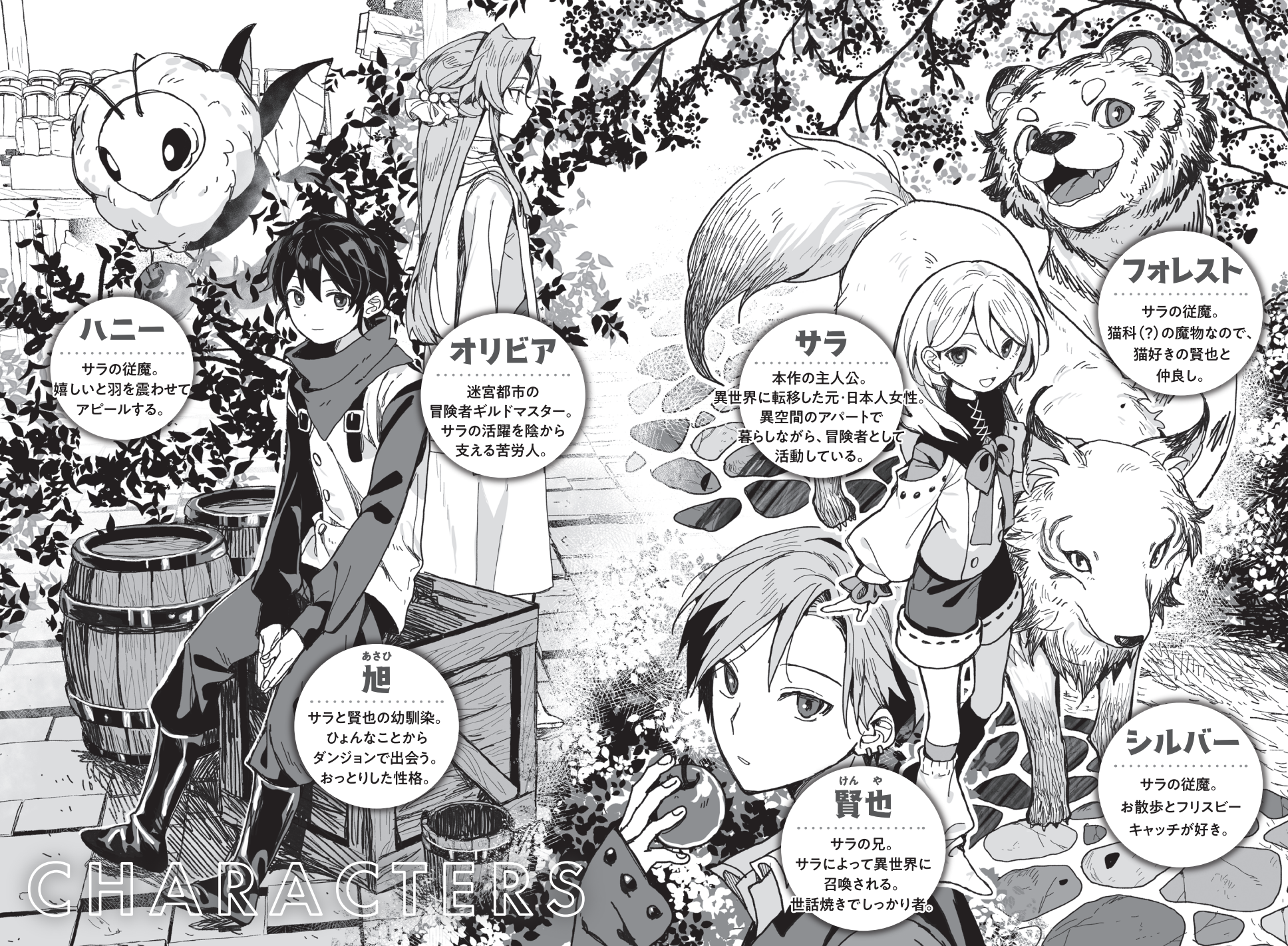
自宅アパート一棟と共に異世界へ

蔑まれていた令嬢に転生(?)しましたが、自由に生きることにしました

5

Kisaragi Yukina
如月雪名
ill.くろでこ

JITAKU APART ITTO TO TOMONI ISEKAI HE


ハニー
サラの従魔。
嬉しいと羽を震わせて
アピールする。
オリビア
迷宮都市の
冒険者ギルドマスター。
サラの活躍を陰から
支える苦労人。
サラ
本作の主人公。
異世界に転移した元・日本人女性。
異空間のアパートで
暮らしながら、冒険者として
活動している。
フォレスト
サラの従魔。
猫科（?）の魔物なので、
猫好きの賢也と
仲良し。
旭（あさひ）
サラと賢也の幼馴染。
ひょんなことから
ダンジョンで出会う。
おっとりした性格。
賢也（けんや）
サラの兄。
サラによって異世界に
召喚される。
世話焼きでしっかり者。
シルバー
サラの従魔。
お散歩とフリスビー
キャッチが好き。
CHARACTERS

第一章　迷宮都市　地下十四階　再び狙われた沙良

突然、異世界に召喚された私、椎名沙良（四十八歳）は公爵令嬢のリーシャ・ハンフリー（十二歳）になって生きることに。私を虐待する継母とその連れ子、そして子育てに無関心で娘の状況に気付きもしない父親の間で苦労したけれど、そこは転生の際に授かった力が役に立った。

地球で私が暮らしていた自宅アパートと周辺の町を異空間に創造して、それを自由に使える能力――ホーム。このおかげで、私は現代日本と同水準の生活ができたのだ。

公爵家を早々に出奔した私は、地球から召喚した兄の賢也、ダンジョンマスターとして異世界に召喚されていた幼馴染の旭尚人と一緒に冒険者活動を始めた。

あれから七年ほどが経った今では、孤児の子供たちの支援も行っている。

冒険の仲間も増えた。従魔のゴールデンウルフのシルバーと、ハニービーのハニー、迷宮タイガーのフォレストだ。猫派の兄はフォレストを可愛がり、毎晩一緒に寝てはテイム魔法を覚えようとしているみたいだ。

少し前に、迷宮都市で私が経営している肉うどん店で編み物教室を開いたんだけど……そこで

知り合ったサヨさんという老婦人が、前世で亡くなった母方の祖母とわかり驚いてしまう出来事も。
色々あったけれど、ホーム、マッピング（地図を表示して転移する力。景色を確認したり、魔法を放ったりできる）、アイテムボックス（容量無限、時間停止機能付き）、召喚（地球の人間を呼び出せる。レベルが10上がるごとに一人召喚可能）を使い、楽しくダンジョンの攻略をしていた私。
しかし、ひょんなことから冒険者ギルドを首になった男性――オリーさんの恨みを買い、命を狙われてしまう。
これ以上、兄たちに心配はかけられないと、独断でオリーさんを他国に転移させたんだけど……

◇　◇　◇

月曜日。
私たちは迷宮都市にある迷宮ダンジョンにやってきていた。
フォレストに騎乗した兄と地下十一階で別れ、私と旭は地下十四階を目指して駆け出す。
道中で安全地帯にいた冒険者のアマンダさん、ダンクさんと出会ったので、挨拶を交わして今週末に会いに行く子供たちの話を伝えておく。
やがて、川で迷宮ウナギを狩る予定の旭とも別れた。

地下十四階のトレントの森へ向かおう。
さぁ、まずはキウイフルーツの採取だ！
先週、生っている果物を直接アイテムボックスに収納できるとわかったので、千個もの採取もあっという間に終わる。
なんなら安全地帯にあるテントに籠って作業してもいい。
マッピングによって、私は半径三十五キロメートル以内の全てを把握できる。これで見れば、どんな魔物も魔法で瞬殺して収納できるんだよね。
ただ、人にバレたくない力だし、ずっとテントに籠っているのはかなり不自然だからやらないけど……
森にいたトレントは遠距離から安全に倒して、二匹いる迷宮タイガーも独占させてもらおう。
さて、時間が大分余ってしまった。
今日は三時間後に安全地帯で皆と合流する約束だ。
兄は地下十一階で果物の採取中だろうし、旭は迷宮ウナギの討伐を毎回楽しそうにしているので声をかけるのは躊躇われる。
この地下十四階は攻略しに来る冒険者も多いから、私が魔物を全滅させてしまったら迷惑だろう。
いずれ召喚予定の日本にいる両親、そしてサヨさんのパワーレベリングの下見がてら、転移して

地下二十九階を攻略しに行こうかな？
いや、一人で地下二十九階に行ったことがバレたら確実に兄から怒られる。
もうちょっと穏当な時間の使い方を考えよう。
今週土曜日は、ミリオネの町とリースナーの町の子供たちに防寒具をプレゼントしに行く予定だ。
その日は兄や旭、アマンダさんをはじめとする冒険者の皆と劇も披露する手はずだ。
子供たちは私との約束を守って生活しているので、ご褒美の料理を作ろうと思っている。
自宅に帰って材料の準備をしておこうかな？　きっと今夜も劇の練習で帰りが遅くなりそうだからね。
シルバーとホームで自宅に戻り、子供たちに作る料理はどれにしようと考える。
コカトリスクイーンの卵を使用したキッシュ、迷宮サーモンのフィッシュバーガー、フライドポテト、シチュー、デザートはダンジョン産の桃でいいか。
ハンフリー公爵領は海に面していないので、子供たちは魚を食べる機会が少ない。
何より揚げた魚料理を知らないだろうから、その味に驚くはずだ。フライドポテトは子供たちの好きな食べ物だしね。
フィッシュバーガーに使用するナンだけど、この世界のパンと比べると格段に美味しい。
喜んでくれそうだなと思いながら、まずはナン種を大量に作る。

二つの町にいる子供たちは、合わせて百五十人。
一日で二つの町を回るので、当日調理する時間はなるべく短いほうがいい。
キッシュとシチューの具材、フライドポテト用のじゃが芋を切っている間に、時間は経過していった。

もうすぐ約束の時間になろうかという頃、私は自宅を出て、再びシルバーと一緒にトレントの森付近に移動した。
彼の背中に乗って安全地帯に戻ろうとしたところで、シルバーがピタリと立ち止まる。
そしてある方向を見据え、低い唸り声を上げた。
危険察知能力の高い従魔が、こんな動きをするってことは……先週の出来事を思い出し、嫌な予感がする。
マッピングで周囲を確認すると、六人組の冒険者が十匹を超えるキングビーの集団に追われながら、トレントの森に向かってきていた。
先週も私、冒険者たちにキングビーをけしかけられそうになったんだよね。
まさかオリーさん、他の冒険者パーティーにも私を害する依頼を出していたの？　私のことをどれだけ恨んでいたのか……

しかも、また同じ手口を使ってくるとは、浅はかとしかいいようがない。
この愚策は、きっとオリーさんの指示なんだろう。
冒険者たちは、リスクに見合う金銭を受け取っているのかな～。
一体どれほどの依頼料を提示されたら、こんな馬鹿な真似ができるのかしら？
クインビーを守るために、集団でいるキングビー。
クインビーの蜜袋が高額で取引されているのは、キングビーの対処をするだけでも危険が伴い、滅多に冒険者が狩ってこないからだ。
キングビーに刺されたら、エクスポーションじゃ治療できない。普通なら、無茶な討伐はリーダーがさせないものだけど。
追われている冒険者は六人しかいないため、自分たちより数が多いキングビーの集団と交戦できるほどの実力があって、初めて私を害することが可能になる。
おまけに、常に八匹でクインビーを守っているキングビーは、魔物寄せを使用すると倍の十六匹になって襲ってくるのだ。
私をダンジョン内で始末したいのはわかるけど、自分たちまで巻き込まれるであろう危険な行為をするなんて頭が悪すぎる。
それとも、オリーさんの提示した条件を呑んだ冒険者は、よほどお金に困っていたのか……

まぁ、悪事に手を染める人間が碌でもないことは確かだ。同情の余地はない。
私はお手柄だったシルバーの頭を撫で、巻き込まれないようにマッピングで旭のもとに転移した。
助ける必要性を全く感じないからね。ふう～。
彼らはきっと、キングビーに刺されることになるだろう。
そして安全地帯に戻ったら、光魔法が使える兄や旭に治療を依頼してくる可能性が高い。
自業自得の結果に、私たちが付き合わされるのは納得できないよ！
旭が治療させられるのは嫌だなぁ～。
先週は女性特有のあの日を言い訳に使っちゃったから、別の方法を考えないと……
「旭～、そろそろ安全地帯に戻ろう」
「俺を迎えに来てくれたの？　何かあった？」
うっ、旭のくせに鋭いじゃん。まぁ、いつもは安全地帯のテント前で集合だからね。
「うん、なんかお腹が痛くて。早く自宅に帰りたいの」
「大丈夫!?　賢也を迎えに行ってすぐに帰ろう！」
ちょろいな……
「ごめんね、もしかしたら午後から休むかも」
「そんなこと、気にしなくていいよ！」

「ありがとう」
マッピングを使って地下十二階で大きなみかんを採取していた兄のもとに行き、ホームで自宅へ戻る。
アマンダさんとダンクさんが心配しないよう、あとで旭とシルバーを地下十四階の安全地帯に送り届けて、事情を説明しておいてもらわないとね。
兄にお腹の具合が悪いので午後から家で休むと伝えると、すぐに救急箱から整腸剤を取り出して持ってきてくれた。
心配性の二人は、今日はダンジョンの攻略を中止してリビングで待機するという。
私に何かあった時にすぐ対応できるように、だそうだ。地球にいた頃のなごりか、こういうところは医者らしいのよね。
患者の容体が急変する可能性を常に視野に入れておくことが、身についているんだろうな。
お弁当を食べて薬を飲んだら、旭とシルバーを安全地帯に送っておこう。

旭がアマンダさんとダンクさんに事情説明をして、私は安全地帯のテントの中で休んでいることにしてもらった。
旭も看病のためテントの中で過ごすという体で、ホームで自宅へ連れ帰る。

シルバーは別のマジックテント内で少し待機しておいてもらう。従魔は食事とトイレの心配をしなくていいので助かる。
これで、もし治療をしてもらおうとさっきの冒険者たちが来ても、魔石に血液を登録する必要があるマジックテント内には入ってこられない。
患部の壊死が始まると大変なので、諦めて地上に帰還するだろう。
ええ、絶対治療なんてしませんよ！
先週、私が体調を崩していたこともあり、兄はとても心配してくれた。
が、今回は仮病なのでバレないようにすぐに寝室に引き籠る。
兄は紳士なので、妹の部屋に勝手に入ることは滅多にない。
前回は朝食時に起きてこない私を心配して様子を見に来たところ、熱があったため看病してくれたのだ。
お腹が痛い程度の症状なら、部屋に入ってきたりはしないだろう。
私はホームで安全地帯のマジックテント内に転移して、先程の冒険者たちの様子を調べることにした。
六人中三人がキングビーに刺されたみたいで、安全地帯に戻ってきていた。
私たちのテントの前にいるけど、残念ながらいくら待っても今日はテントから出ないよ。

ついでに、十四階に再出現していた迷宮タイガー二匹を倒して収納しておいた。
旭から事情を聞いたアマンダさんとダンクさんが、地下十四階を拠点にしている迷宮都市の冒険者に私の状況をすぐに周知してくれただろう。
もし他領から来ている冒険者がいても、皆知らぬ存ぜぬを通すはずだ。
冒険者は自己責任、何かあればパーティーリーダーの采配に問題があっただけのこと。
クランに所属する人間じゃなければ、わざわざ事情を教える必要もない。
そもそも私たちが安全地帯で治療行為をするのは善意によるものだ。
パーティー内に治癒術師がいるからといって、救護義務が発生するわけではないので当てにしてもらっては困る。
それにしても、オリーさんは本当に崇るなぁ。
兄があの手のタイプは粘着質だから気をつけろと言っていたけど、まさか二組のパーティーに依頼を出していたとは思わなかったよ。
そんなに冒険者ギルドを首になったことが腹立たしいなら、ちゃんと職務を全うすればよかったのに。
ギルドマスターの秘書という役割は、あらゆることを想定しなければできない仕事なのよ？
上司のスケジュールを管理するだけじゃなくて、冒険者とも良好な関係を保つ必要性がある。

彼はそれを怠ったにすぎない。
迷宮都市でトップの稼ぎを叩き出す私たちのパーティーを、蔑ろにした態度を見せるなんて絶対にしてはいけなかった。
冒険者ギルドマスターのオリビアさんから切り捨てられたって、文句は言えないだろう。
う～ん、転移で他国に放り出すだけじゃ処置が生ぬるかったかもしれない。
部屋に置いてある荷物も、きちんと渡しちゃったし……復讐のため、死に物狂いで迷宮都市に戻ってきたりしないよね？
もし戻ってきたら、今度はもっと遠い国に荷物も持たせず放り出すしかないか。
六人組の冒険者はしばらく安全地帯で待っていたようだけど、私たちがテントから出てこないので焦り出した。
そして、キングビーに刺された三人と他の人たちとで仲間割れをし始める。
まぁ、刺された人たちは呑気に待っていられないんだろう。
声は聞こえないけど、すぐにでも地上に帰還したそうな様子だ。
派手に揉めたあと、怪我した三人は残りの仲間を置いて安全地帯を出ていってしまった。
体に毒が回っている状態で、あの三人は地下十四階から地上まで帰還できるのかしらね？
そこまで見届けて、私はシルバーと自宅に戻った。

去っていった三人は最悪ダンジョン内で命を落とすかもしれないけど、自業自得だからなんとも思わない。

人の命を奪おうとするなら、自分も奪われる覚悟を持っているだろう。問題はこの場に残った三人だ。

残った人たちではダンジョンを攻略できないから、彼らもじきに地上へ帰還するだろう。そして事の顛末を話すため、オリーさんが泊まっていた宿へ行くと思う。

でも、依頼を出した当人は既に宿にはいない。

この冒険者たちは事前に依頼料を受け取ったものの、三人の負傷者を出した。仲違いをした今、今後いつ冒険者活動を再開できるかは不明。

かなり高い代償を払ったことになる。

B級冒険者でパーティーを組んでいない人は迷宮都市にはほぼいないので、三人に代わる追加メンバーを集めるのは至難の業だ。

しかも今回のような仲間割れの噂は、すぐに冒険者中に広まる。誰もパーティーを組んではくれないだろう。

あとはさっさと迷宮都市から出ていってくれればいい。私を狙ったせいでこうなったと逆恨みさえしなければ……

夕方、リビングで待機していた兄と旭に「薬が効いて腹痛は治ったよ」と笑顔で伝えると、二人はほっとした表情を見せた。

まだ本調子じゃないからと断って、私は雑炊を作って食べる。

一応体調不良だと言って休んだ手前、申し訳ないけど夕食は出来合いのもので我慢してもらおう。

兄たちにはアイテムボックス内にあるチキン南蛮弁当を渡し、味噌汁はインスタントを飲んでもらった。

夕食後。

偽装工作のために、まず旭とシルバーを地下十四階の安全地帯のテント内に送り返す。

最近はシルバーと一緒に宿泊しているからね。

続いて、兄とフォレストを地下十四階の安全地帯付近に送り、安全地帯に帰ってテント内で泊まってもらう。

私は一人でテント内にいることにすれば問題ない。

ついでに、この階層に再々出現していた迷宮タイガーを二匹倒して収納する。

兄たちがホームではなくダンジョンで寝泊まりするようになってから、安全地帯には私たち用のテント——六人用マジックテントを三張り設置済みだ。

三人パーティーなのに、六人用のマジックテントを各々で使うのかと、アマンダさんとダンクさんには呆れられたけど……

もし従魔のシルバーとフォレストをテントの外で休ませ、その間に彼らが何者かに危害を加えられたりしたら恐ろしいので、マジックテントは必要だ。

マジックテントは登録者以外は入れない仕組みになっているし、防犯設備としては日本のセキュリティより優秀だと言っていい。

強固な鍵といえど開けることは不可能ではないから、魔法がない日本で完璧な防犯を実現するのは難しいと思う。

攻略二日目。

兄と旭を迎えに行き、ホームの自宅で朝食を食べる。

朝食のメニューは、法蓮草と卵のバター炒め、キンピラ、子持ちししゃも、オクラ納豆。

茄子の味噌汁、ほうじ茶と一緒にいただきます。

ししゃもは昔、よく朝食にお母さんが焼いてくれた。

以前に比べると最近は身が小さくなり、入っている卵も少なくなった気がするのは私だけ？

北海道産の本ししゃもは高すぎて買えないし……

いや今なら購入できるかもしれないけど、ネットが繋がらないからホーム内の百貨店で北海道物産展がいつ開催されるかわからないのよね。

マッピングで常時覗いていればいつかわかるかも？　あぁ、そんなことを言っていたら海鮮丼が食べたくなってきた。

いつも百貨店の北海道物産展に行くと試食しまくっていたんだよね～。

ホームの力で兄と旭をそれぞれのテント内に送り、私も安全地帯に顔を出す。

すると、アマンダさんとダンクさんが心配そうな顔をして挨拶しに来てくれた。

二週連続で体調を崩したことになっているから、娘のような年の私を気遣ってくれているんだね。

今の私の十九歳という年齢に、前世の年齢を足したらすっかり二人より上だけど……

どうしてか、私は転生してから身長が全く伸びない。異世界人の平均身長よりずっと低いので、子供に見られやすいのだ。

冒険者たちには、実年齢よりかなり幼く思われているんだろうな。

「もう大丈夫です！」

私が元気な様子を見せると、アマンダさんは眉間に皺を寄せて昨日の出来事を話し出した。

「そういえば、昨日もまたキングビーの毒針に刺された冒険者がいたよ。見ない顔だったから他領から来たやつらだと思うけどさ。なんかサラちゃんたちが、ここで無償で治療しているのを知って

それを当てにしていたみたいだった。最後は仲間内で派手に揉めて安全地帯から出ていったよ。前に王都から来た『白銀の剣』といい、今回のといい、他領から来る冒険者は質が悪いね。サラちゃんたちも、巻き込まれないように注意するんだよ」

いや、もう既に思いっきり巻き込まれたあとです……

「わかりました。知らない人に会ったら気をつけますね」

「お兄ちゃんが、サラちゃんに手を出すやつは片っ端からやっつけてくれるだろうから安心しな。隣の旭は……多分守ってくれるだろうよ」

旭の存在、薄っ！

まぁ、アマンダさんとは普段から討伐で一緒になるわけじゃないから、無双している旭を知らないのも無理はない。

きっと優秀な治癒術師としての姿しか見ていないんだろう。

さて、本日一回目の攻略開始だ。

昨日に引き続き、兄はフォレストに騎乗し、地下十一階まで行って果物採取。旭は迷宮ウナギの討伐、私は果物と薬草採取だ。

本当に自由すぎるよ、このパーティー！　私はシルバーの背に乗って、トレントの森へ向かう。

途中で地下十三階に転移し、置いてきたハニーを呼ぶとすぐに来てくれた。

そういえば、ハニーが率いるコロニーが全部で四十八匹になっていたけど、配下も皆、私の従魔扱いなんだろうか？

ハニーにコロニーの仲間を呼んでとお願いしたら、四十八匹のキラービーが降りてきてビビった。敵意のようなものは感じないので、私にテイムされたハニーのコロニーは眷属扱いとなりそうだ。言葉が通じるかしらと思い、キラービーに「一回転してみて」と頼むと、四十八匹が一斉に回転した。直接テイムしたわけじゃないけど、こちらの言葉は理解できるらしい。

それにしても……蜜蜂の体型をしているのに、何故ハニービーは蜜袋が体内にあるんだろう？

これだけのキラービーがいたら、養蜂で蜂蜜が沢山採れそうなのになぁ～。

これからもコロニーの仲間は増えていきそうね。

ちなみに、ハニーだけはコロニーを持つためホーム内で一緒に生活できないみたい。

体長二メートルもある蜂の集団は迫力満点だしね。

だけど、迷宮都市のダンジョンを攻略後は、ハニーとコロニーをどうしたものか……

次に向かうダンジョンに、皆を連れてマッピングで引っ越しする？

その頃にはハニーがハニービーからクインビーに進化していると思うけど、コロニーの仲間は自動的にキングビーに進化するのかしら？

サヨさんから聞いた話によると、テイムされた従魔は、普通は進化しないらしい。
ただ、シルバーウルフからゴールデンウルフになったシルバーの例があるので、実際のところはわからないのだ。
迷宮都市にあと数年はいる予定だし、その時になったら考えよう！
あまりキラービーの数が増えないといいんだけど……
ハニーは自分のコロニーを私に見せて、少し得意げにしている。可愛いから頭を撫でてあげるね。
この子だけレベルが30なのは、コロニーの人数に左右されているのかもしれないな。
ハニーを連れてトレントの森へ転移する。
流石に四十八匹のキラービーを地下十四階に連れていくことはできないから、ごめんなさい。
さくっとキウイフルーツ千個の採取を済ませ、トレントと迷宮タイガーを倒して収納する。
その間、周囲の警戒はシルバーとハニーに任せておけば大丈夫。
襲いかかってきたフォレストウサギはシルバーが頭にアイスボールを撃ち、キラープラントはハニーが上空から急降下して針で突き刺して瞬殺。
私は二匹にお礼を言って頭を撫で、倒された魔物を収納した。
旭との集合時間まで大分時間に余裕があるので、子供たちの料理の下準備をしておこう。
ハニーを地下十三階に送り届け、私はシルバーと自宅に戻った。

まずはフィッシュバーガー用のキャベツの千切りを大量に作る。
迷宮サーモンは手の平ほどの大きさに切って衣をつけ、現地で揚げるだけの状態にしておく。
トマトソースも作りたかったけど……ここで時間切れとなった。
本音を言えば、フィッシュバーガーにはタルタルソースを合わせたいんだけどなぁ～。
異世界には、まだ早い味つけかしら？　それとも子供たちだけ食べる分には問題ない？
兄にはお弁当を渡しておいてある。昼食を作る必要があるのは私と旭だけだ。
安全地帯のテントに転移して、旭と一緒に自宅に戻る。
「旭～。お昼は何が食べたい？」
「あれ？　今日はお弁当じゃないの？　確か今朝、オムライスを作って賢也に渡してたよね？」
「うん、お兄ちゃんのリクエストでね。昨日、地下十三階と十四階の果物を採取できなかったから、今日は自宅に戻らずテント内で食べて、果物を全部採ってくるって張り切ってたよ」
「ふ～ん、そうなんだ。俺の分のオムライスはないの？」
「旭の分はありません」
私が口止めしたことを兄にバラした恨み、まだ忘れてないわよ！
旭はガッカリした表情で「じゃあなんでもいい」と言ってリビングに移動してしまった。
そんなにオムライスが食べたかったの？　仕方ないなぁ～。

ケチャップ味が大好きな旭のために、ナポリタンでも作るか。
玉ねぎ、ピーマン、赤ウインナーを切って、少し太めのパスタを茹でていく。
刻んだ材料を炒め、茹で上がったパスタと共にケチャップで味つけ。最後に半熟の目玉焼きを載せたら完成だ。
「旭〜。ナポリタンできたよ〜！」
ダイニングから呼ぶと、旭がダッシュで席に着く。現金なんだから。
自分のアイテムボックスからソーダを出してグラスに注いでいるよ。
「いただきます！」
食前の挨拶と同時に旭はナポリタンをフォークでくるくると巻き、食べ始めた。
粉チーズは、かけなくてもいいのかしら？
私はかける派なので、タバスコと一緒にたっぷりとかけちゃいます。

食事を終えてテントから出ると、怪我人が待機していた。
地下十四階を拠点にしている人らしい。男性の冒険者だ。
フォレストウサギの二本の角で太ももを刺され、角が貫通したみたい。うっ、痛そう。
既に鎧は脱がされ、傷の場所より上を紐で縛って止血済みだ。

さらに傷の手当てがしやすいよう、ズボンも短く切ってある。
旭は怪我の状態を確認して水をかけ、すぐに治療を終えた。その間わずか数十秒。
応急処置をしていたところを見ると、兄の講義内容は役に立っているようだ。
地下十三階で直接講義を受けた冒険者から、クラン内のメンバーに情報が届いたんだろう。
皆、命は惜しいらしくて真面目に聞いてくれたからね。
治療する兄も旭も、事前に応急処置がしてあればすぐに魔法を使用できる。
怪我人も痛い思いをする時間が短くなって嬉しいだろう。
男性冒険者からお礼を言われて、旭は金貨十六枚を受け取った。
異世界の金貨は日本円に換算すると一枚百万円くらい。他にも硬貨があり、鉄貨が百円、銅貨が千円、銀貨が一万円だ。
おっと旭、そのまま手を引かれているよ。これはどうも冒険者の好みのタイプだったらしい。
異世界は恋愛に寛容だからね〜。
旭が振り返って、私を見ながら口をパクパク動かして助けを求めてくる。
口の動きに注目すると、「へ、る、ぷ、みー」と言っていた。何故そこで英語なの？
恋愛は自由だけど本人が嫌がっているし今は攻略中だ。リーダーの私が対応するしかないか。
「あの〜すみません。今から攻略しに行くので、うちのメンバーを返してもらえませんか？　あと、

彼には恋人がいるので」
旭を見ると、私の言葉にコクコクと頷いている。
あれ？　やっぱり兄のことが好きなんじゃないの。
私が聞いた時は否定していたくせに、幼馴染兼恋人の妹にバレるのは恥ずかしかったのかな？
別に小姑になるつもりはないわよ。料理ができなくても怒ったりしないしね。
それに私と一緒に行動する間は、作ってあげるから心配しなくても大丈夫。
ただ、ある程度異世界のダンジョンを制覇したあとは、別行動になると思うし、多少はできたほうがいいと思うけど……
私も好きな人ができたら、結婚する可能性だってないわけじゃない。
兄は料理の味にうるさいほうだし。ここは二人に、少しずつ料理を教えておいたほうがいいかしら？
「そうなんだ。悪いな、知らなかったよ」
男性冒険者はあっさりと手を放してくれた。
身長が二メートルもある男性に、突然手を掴まれた旭は涙目だ。もう本当にビビリなんだから。
旭は空手ができるんだから、いざとなったら素手で倒せる相手でしょ？
こらっ、私の後ろに隠れるんじゃない！

その後、私たちは別々に行動を始める。
シルバーの背中に乗ってダンジョン内を走っていると、昨日見かけた冒険者六人組の残り――怪我をしていなかった三人の冒険者が、トレントの森に向かっていくのが見えた。
嘘でしょ!! 地上に帰還してなかったの!?
アマンダさんは安全地帯から出ていったと言ってたけど……
もしかして地下十四階で一番換金額の高い迷宮タイガーを、三人で狩るつもり？
周りの木々が全てトレントなのに？
先に狩られるのが嫌だったので、私はマッピングで迷宮タイガーを探して倒すと収納した。
三時間に二匹しか出現しない迷宮タイガーを渡すことなんてしない。
彼らはメンバーを失った損失分を、穴埋めしようとしているのかもね。
でも、事前情報なしで地下十四階を三人で攻略するのは危険すぎるわ。
命が惜しくないのかしら？
トレントからウィンド系の魔法攻撃を受けても、あなたたちの治療は拒否させてもらいます。
そのための言い訳を今から考えておかないと……
立て続けに体調不良になってダンジョン攻略を中止していたら、絶対兄に気付かれるだろう。
兄や旭に冒険者たちの治療を拒否させつつ、不審に思われないような言い訳は何があるかなぁ～。

相手を治療させないためには、敵対していることを率直に明かしてしまえばいい。
でも、二人には私が狙われたことを秘密にしているので言えない。
ここは、私に対する過保護っぷりを利用しよう。
冒険者たちがこの先どうなろうと知ったことではないので、私はホームで自宅に戻った。
残りの作業を始めるか。トマトソースとタルタルソースの二種類を作っていこう。
大量に作ってアイテムボックス内に収納しておけば、いつでも使用できるので便利だ。

三時間後、二つのソースを作り終えてホームでトレントの森にシルバーと戻り、安全地帯へ走っていった。
テント前までシルバーの背に乗っていくと、怪我人を治療している旭と兄の姿が見えた。
知らない顔の冒険者二人だったけど、担架で運ばれていた様子を見るに、迷宮都市の人たちだ。
トレントを狩ろうとして魔法にやられたのか、服が引き裂かれ皮膚から出血していた。
やはり地下十四階は魔物が強いんだろう。
兄と旭は傷口に水をかけ、状態を確認して素早く治療する。
男性冒険者二人は痛みで唸っていたのに、治療のあまりの速さに唖然とした表情になった。
兄たちの治療を受けたのが初めてだったんだろう。

地下十階で仲良くしていた冒険者たちは、拠点にしていた三か月の間に、何度も治療している姿を見ているからあまり驚かなくなっていたんだよね。
準備が整ってさえいれば、十秒くらいで治療は終わる。
怪我人だった二人は狐にでもつままれたかのように首を傾げ、お礼を言って治療代を兄と旭に渡し、帰っていった。
そして、二回目の攻略開始。
兄と旭は採取や討伐の合間に、レベル上げのフルマラソンをするつもりかな？　兄のマンゴーの採取は終わったのか？
今日はトレントの森の中央に生っているようなので、先程見かけた三人の冒険者と鉢合わせしないといいけど……
私は安全地帯を出ると、シルバーの背に乗って地下十三階に転移した。
ハニーを呼ぶと、すぐに上空から降りてくる。
そう。これから二匹を連れて、地下七階のガーゴイルを狩りに行くのだ。
リースナーの町と迷宮都市で暮らす子供たちの家に置物代わりのガーゴイルを設置しようと思っているのだが、まだ数が少し足りない。
全部で二十六体必要だからね。二匹と一緒に地下七階に転移し、マッピングでガーゴイルを索敵。

この場から遠距離攻撃で倒して収納できるけど、それじゃあつまらない。発見したガーゴイルのもとに走って昏倒させる。
あっ、しまった！　ガーゴイルは解体ナイフだと魔石が取り出せないよ！
いつも兄たちに魔石の場所を教え、電子切開してもらっていたんだっけ……
マッピングで体内を調べて魔石を確認したら、アイテムボックスに収納できないかな？
まっ、考えるよりやってみましょ。『体内の魔石のみ収納』と念じて、アイテムボックスを使う。
結果、収納された……何このヤバイ能力！
魔法を使わなくても、マッピングとアイテムボックスだけで無双できるじゃん！
しかもＭＰ消費は０だ。最早、私が魔物を倒すのにＭＰは不要になった。
だって魔物は魔石を取り出したら死ぬんだから。しかも今回のやり方の場合、傷が一切つかない状態で……
あぁ、でも血抜き処理が必要な魔物もいるから、魔石を取り出したら後処理は必要か。
この力の新たな使い方は兄たちには黙っておこう。
人間相手に使用したら伝説の暗殺者になれそうだよ。
たとえば『心臓を収納』と念じれば、相手の心臓を取り出せるんだ。
三十五キロメートル先にいた人間を殺しても、足は絶対につかないだろう。

そして、時間停止の機能がついたアイテムボックス内では、生きた心臓が保管される。
この能力があれば……私は旭の妹で、十六歳で亡くなってしまった雫ちゃんのことを思い出した。
間に合わなかった心臓移植。ドナーが必要だからどうしても順番待ちになる。
倫理的に許されることじゃないとわかっていても、旭は欲しかっただろうな……
彼女もまた生まれ変わって、今はどこかで幸せに暮らしているんだろうか？
最近、今は亡き私の妹――香織ちゃんの夢を見た。一度も会えなかった妹なのに、夢の中の子が間違いなく香織ちゃんだとわかるのだ。
『痛いよ』『もう叩かないで』『お母さんに会いたいよ！　お姉ちゃん助けて！』
夢とは思えない訴えかけるような内容は、思い出す度胸が締めつけられる。
二人とも、もし転生しているとしたら……次の人生は幸せなものだといいな。
実は、アイテムボックスでもう一つ気になっていることがある。
それは生き物を収納できるかという点だ。手紙には何も書かれていなかった。
異世界に転生する系の小説だと、『ただし生き物は入りません』などの注意書きがあることが多い。
これは万が一の時を考えて実験しておくべきか……
いきなり人間で試すのは怖すぎるので、まずは魔物からと思って視線を送ると、シルバーとハニーは首をブンブンと横に振った。
どうやらこの子たちには言葉に出さなくても、私が思っていることが伝わるらしい。
なんだろう……念話みたいな感じなのかしら？
適当な魔物で試すべく、地下七階の魔物をマッピングで探したところミノタウロスを発見。
その場で『収納』と念じると、マッピングから消えた！
アイテムボックスを確認したら、タブが一つ増えている。【生き物欄】って……そのまんまじゃないか！
『ミノタウロス一匹』と表示されている。
わ～なんだろう。本当に能力の取り扱い説明書が欲しい。
中に入っているミノタウロスはどうなっているのかな？
アイテムボックスは時間停止機能がついているから、本人？　には収納された自覚はないのかも？
これなら人間も入れられるだろうなぁ。
時間が停止するとなると、中の生き物は、取り出すタイミングによっては下手したら浦島太郎になりかねない。
コールドスリープなんて比較にならないほど良好な状態のまま、何十年と保管することも可能だ。

輸送手段として使用すれば、本人は一瞬で違う場所に着いたと錯覚することだろう。
カルドサリ王国は現在、他国と戦争をしていないけど、仮に戦時中であったなら、大量の兵士の移動をコストゼロで実現しかねない危険な能力だ。
しかも、移動に必要な兵糧が不要なのだから……
このことは絶対に知られないようにしないと、私の身が危うい。
ダンジョン内で収納すれば、生きた状態の魔物を外に連れ出せる。
うん？　これ、ダンジョンマスターだった時の旭に使えば、召喚の枠を消費しなくてもダンジョンから脱出させられたんじゃないかしら？
でも、その場合は若返りの機能がないから、四十五歳のまま私たちと一緒に冒険者をすることになっちゃうか……
あの頃は私も兄も子供だったから、大人がいたらちょうどよかったけど……兄は思い切り嫌がりそうな状況だなぁ。
旭に保護者役は務まらないだろうし、何より恋人と年齢差があると色々大変そうだ。
アイテムボックスの能力は思った以上に物騒だと気付いて、あまり多用しないようにしようと固く心に誓った。
とはいえ、時間が停止した状態で怪我人を運んだりもできそうなので、使い方次第だよね。

その後、二十匹のガーゴイルから魔石を抜き取り収納していった。
ミノタウロスのお肉は非常に美味しいので、ついでに十匹狩っておく。
血抜き処理は、シルバーに頸動脈をアイスボールで切ってもらった。
従魔も魔物を倒すと経験値が増えてレベルが上がるかもしれない。
テイム魔法がレベル４になり従魔のステータスが見られるようになったけど、これも謎が多いんだよね～。
今までシルバーとは一緒にダンジョンを攻略していないので、サンプルデータがない。
比較できないから、どうやったらレベルが上がるか、その仕組みが全く不明なのだ。
できれば従魔のレベルも上げておきたいところ。
人間は高レベルなほど寿命が延びるらしい。きっと、魔物も同じだと思う。
ペットは先に死んでしまうから、私の従魔には長生きしてほしいのだ。
それとも私のＭＰが消費されている限り、死なないのかしら？

三時間後、ハニーと別れ、地下十四階の安全地帯までシルバーに乗って駆ける。
安全地帯に行く途中で例の三人の冒険者とすれ違った。

その瞬間「チッ」と舌打ちが聞こえたので、暗殺対象としてしっかり顔を覚えられていたらしい。
わざわざ狙っていると教えてくれてありがとう。あなたたちの治療は絶対にしないから、あしからず。
安全地帯に入り、テントの近くまでシルバーに送ってもらう。
テントの中では既に兄と旭が待っていた。ホームの自宅に戻る前に、お願いをしておこう。
私は兄に抱き着いて、泣いているフリをする。
「お兄ちゃん。さっき三人組の冒険者とすれ違ったんだけど、迷宮都市の冒険者じゃないみたいで私の胸を触ろうとしてきたの！　急いで逃げてきたんだけど、すっごく怖かった～！」
急に抱き着かれた兄は少々戸惑った様子だったけれど、話を聞いて突然キレた。
「殴ってきてやる！」
「ちょっと痛い目に遭わせてくるよ！　俺だって触ったことないのに！」
二人が超過保護なのを忘れてたよ……そして旭よ、あなたは触りたかったの？
実際に触られたわけじゃないのよ、触ろうとしてきたって言ったでしょ！
鼻息荒くテントから出ていこうとする二人を、どうにか宥めすかして引き留めた。
そして、最後にちゃっかりお願いをする。
「嫌な思いをさせられたから、あの人たちの治療はしないでね」

「あぁ、わかった。三人組の冒険者の治療は絶対にしない」
「来たら魔力切れだって断るよ」
ふぅ～、やれやれ。
これで実際は殺されかけたことを知ったら、兄たちは激怒するどころじゃ済まないだろうな。
他国に転移させたオリーさんを捜し出して、再起不能にしそうだ。
旭は回し蹴りで意識を刈るかも……
レベルの高い旭が本気で蹴ったら、頸椎が折れて死亡するんじゃないかしら？
なんにせよ、二人が治療しないと約束してくれたので安心する。
ちょっと言い訳がアレだけど、異世界でもセクハラは通じるだろう。
あとでアマンダさんとダンクさんにも報告して、地味に嫌がらせをさせてもらおう。
地下十四階を拠点にするなら、冒険者とは仲良くしておいたほうがいい。
攻略中にポーションや食料が足りなくなったとしても、交流があれば売ってくれることもあるからだ。
アマンダさんは地下十八階を攻略していたクランリーダーで、ダンクさんは自身も凄腕の冒険者であることに加えて、父親が地下十九階を攻略している迷宮都市トップのクランリーダーだ。
そんな二人に可愛がられている私にセクハラを目論んだなどと噂されれば、迷宮都市では誰も相

手にしてくれなくなる。
アマンダさんとダンクさんは迷宮都市で十年以上活動しているから、かなり顔が広い。
自分たちのクラン内だけじゃなく、交流のあるクランリーダーにも話を回してくれるだろう。
例の冒険者たちには、諦めてさっさと迷宮都市から去ってほしいよ。
とはいえ、三人だけで攻略を続けようと残ったのなら、他領のダンジョンでそこそこ深層を攻略していた実力者なのかもしれない。
でも、お目当ての迷宮タイガーは全て私が収納させていただくわ。
何度トレントの森に入っても、迷宮タイガーがいることはないから。
もう本当に、兄たちにバレないうちに早く迷宮都市から出ていってね。
私は二人に、人を傷つけることはなるべくしてほしくないから……
兄と旭には治療だけをしてほしい。
法が機能していない異世界で甘い考えだとわかってはいるけれど、手を汚させたくない。
せめて自分に降りかかった火の粉は自分で消したいのだ。
私なら穏便に処理できる。手紙の人から与えられたマッピングを使用して、危険人物を排除すればいい。
オリーさんを他国に転移させた時は意識があるままだったから、次回があればドレインで昏倒させてからやろう。そうすれば相手に気付かれず処理できるだろう。
今日の夕食は、コカトリスキングの肉を使用した唐揚げ、フライドポテト、チーズナン、シチュー、デザートのキウイフルーツだ。
唐揚げは初披露なので皆の反応が楽しみだなぁ～。この料理は、エールにぴったりだと思う。
アマンダさんとダンクさんが、「酒が飲みたい」と叫ぶ姿が目に浮かぶようね。
アマンダさんのパーティーはロールキャベツ、ツナ入りのキッシュ、トマトスープ。ダンクさんのパーティーはハイオークの肉を使用したカツサンド、チーズオムレツ、トマトスープを作るようだ。
まずは、コカトリスキングを一口大に切り、醤油、みりん、生姜の汁で下味をつける。
次に、フライドポテト用のじゃが芋を切って水にさらしておく。
最後に、シチューの材料を切って炒め、ローリエを入れ煮込んだ。
私はカリッとした食感が好きなので下味がついた肉に片栗粉をまぶし、一回目は低温で、二回目は高温で揚げる。
唐揚げは大量に揚げて各リーダーにお裾分けしよう。皆さん、熱いから火傷しないように気をつけて食べてくださいね。
フライドポテトを揚げる傍ら、フライパンでチーズナンを焼く。

火が通ったスープにシチュールウを入れたら完成だ。
唐揚げを一口食べたダンクさんは、案の定「酒が飲みて～！」と叫んだ。
予想通りの反応に笑ってしまう。
「サラちゃん、なんだこれ！　凄く酒に合うじゃないか！　フライドポテトと合わせたら、最強の組み合わせで無限に食べられるぞ！」
口に合ったらしく大絶賛だ。
「これは唐揚げです。コカトリスキングの肉を揚げた料理ですよ～」
「おいこらっ、数が少ないんだから一人三個までだ！」
リーダーに構わずメンバーが好き放題食べ出すから、ダンクさんが怒っている。
一方、アマンダさんは無言で食べ続けていた。
そんなに急いで食べなくても……気に入ってもらえたのかな？
こちらのパーティーは、お行儀よくリーダーが食べ終わるのを待っているらしい。
アマンダさんが持っているフォークを置くと、メンバーが食べ始めた。
「サラちゃん、唐揚げは最高だよ！　なんでこんなに美味しいんだろうね。もう本当に、お嫁に来てほしいくらいだ。うちのメンバーで、気になるやつはいないかい？」
アマンダさんから、嫁に来いと言われてしまった。

それ、必然的にパーティーへ加入することになるじゃないですか……
「あ～、悪いんだが妹はまだ子供だ。嫁に行くのは早すぎる。誘うのは十年後にしてくれないか」
「お兄ちゃんは心配性だね！　十年も先の話かい？」
アマンダさんは、兄の言葉に大笑いした。
背が低いせいで、子供に見えるかもしれないけどさぁ～。
私は十分大人だから！
唐揚げは大好評で、「地上に帰還したらまた作ってほしい」と頼まれた。
どうやら、お酒と一緒に食べたいらしい。
子供たちの冬支度で今は忙しいため、手が空いたら夕食会をしましょうと約束する。
こんな風に異世界の人たちと仲良くなれて嬉しい。早く家を建てて、遊びに来てもらいたいな。
アマンダさんとダンクさんのパーティーメンバーであるケンさんとリリーさんから作り方を聞かれたけど、醤油もみりんも生姜も片栗粉も異世界で見たことがない。
代わりに、塩、胡椒、ニンニクで下味をつけて小麦粉をまぶして揚げる方法を教えた。
食事が終わったあとに、デザートのキウイフルーツを配って皆で味わう。
もうダンジョン内の食事がまずいとは言わせないわよ！
これまで私は、かなり異世界の食生活を改善してきた。

秘伝だらけのレシピだけど、バーベキューも卵料理も揚げ物も今までなかった料理だ。
料理担当のケンさんとリリーさんが色々覚えていってるから、いずれクラン内にも調理方法が伝わるだろう。
デザートを食べ終えたら、今週日曜日に予定している劇の打ち合わせを開始する。
まずアマンダさんに、メンバーたちの演舞用の衣装を渡した。
「サラちゃん、衣装を作ってくれてありがとう。これは珍しいデザインだけど異国のものかい？」
「はい、華蘭の奥様に手伝ってもらったんです。素敵な感じに仕上がっていると思うので、試着してくれませんか？」
アマンダさんはメンバーに衣装を手渡しながら、試着するよう伝えてテントに送り出した。
その後、アマンダさん用の亀の着ぐるみパジャマもどきを渡すと、思った通り微妙な顔をされる。
「サラちゃん、私の衣装はコレなのかい？　なんだか可愛らしいデザインだけど……」
ですよね～。そもそも着ぐるみパジャマって子供たちが着るものだ。
当然、デザインは子供らしいものになる。
でも亀の衣装が他に思いつかなかったため、諦めて着てもらうより他にない。
その代わり当日は、タートルを五匹出す予定だから勘弁してください……
なお、アマンダさんたちが演じる劇は『浦島太郎』ではなく、急遽『うさぎと亀』に変更することになった。だって主役の浦島太郎役がいないんだもの！
話の内容を書いた羊皮紙を渡し、台本を覚えてもらう。
こちらの話は、あまり台詞がないので大丈夫だろう。
次はリリーさんと私の扇舞の衣装合わせ。
アマンダさんのパーティーメンバーに組み立ててもらった、普通のテント内に入って服を着替える。
リリーさんは女性らしいラインのヒラヒラとした服を身に纏って、ご機嫌な様子だ。
「劇が終わったら、その衣装は持って帰っていいですよ」
そう言ったら、とても感激してくれた。
私たちの衣装は当日まで内緒だから、そのまま元の服に着替えてテントから出る。すると、男性冒険者たちからガッカリされた。
兄はいつも通りの様子だったけど、旭がなんでそんなにガッカリしているのか謎だ。
テントの外では、演舞の衣装を着た冒険者が揃って待っていた。
サヨさんに頼んで、衣装を袖なしにしたのは正解だったわ！
皆さん惚れ惚れするような上腕二頭筋をお持ちで……
密かに筋肉フェチな私はテンションが上がる。こんな機会でもないと、兄にすぐ目隠しされてし

まうのだ。上半身ぐらい、好きに見させてくれたらいいのに～。
衣装のサイズに問題がないか一人ずつチェックする際に、何気なく触っておいた。
セクハラじゃありませんよ？　サイズが合っているか確認するためですからね！
たまには私も潤いが欲しいお年頃なのよ～。
兄と旭はいつも二人で仲良くしてるからいいでしょ！
まぁ、事前に測ったサイズに合わせてサヨさんが型紙を起こしたので、全員サイズは問題ないんだけども。
私が男性冒険者の衣装サイズを確認する間、兄と旭にジト目で見られていたことは気にしない。
もう二人とも過保護がすぎるよ～。
アマンダさんは一人でテントに入り、着ぐるみパジャマを試着して戻ってきた。
衣装の披露は私たち同様、当日まで秘密にする気らしい。
多分あの着ぐるみパジャマを着た姿を、パーティーメンバーに見られるのが恥ずかしいんだろうなぁ。
衣装合わせ終了後、それぞれが練習を行い、私とリリーさんも先週合わせた扇舞の仕上げにかかる。
リリーさんは剣舞を習っていたこともあり、体幹がしっかりしていて非常に筋がいい。

あとは舞扇の扱い方を練習すればいいだけだ。
舞扇は、舞台で映えるように少し大きめのサイズで作られているから、慣れるまで扱いが少々難しい。
リリーさんは舞扇を何度も開いたり閉じたりして、私の動きを必死に覚えている。
蝶の羽ばたきを再現した、ヒラヒラとする動作には細心の注意が必要だ。
この動きが悪いと、女性らしい繊細さを表現できない。
剣舞のように鋭い動作ではなく、静を主体とした扇舞は派手さに欠けるものの、見る人を魅了するには十分な新鮮さがあるだろう。
本番を五日後に控え、私の練習も本格的にスタートだ。
覚え込んだ動きを、なるべく転生前の状態に近づけたい。
せっかく異世界の人に日本の伝統舞踊を披露するのだから、いいものを見せたいではないか。
時々、リリーさんの舞の仕草を直しながら自分の世界に集中する。
あぁ、こんなに真剣に舞を踊ったのはいつ以来だろう。
社会人になって仕事が忙しくなり、休日は家事に追われる生活を続けるうちに舞を練習する時間は取れなくなってしまった。
平日は仕事から帰ったら夕食を作るので精いっぱい。

経理事務の仕事は特に月末月初が大変忙しい。決められた日までに月次処理を終わらせて数字を本社に報告する必要があるので、大抵一週間は残業が続くのだ。
それを思えば異世界に転生してから、仕事とは無縁な生活を送れて幸せだなぁ。
冒険者活動はストレスがないので楽しいし、年収も軽く数百億を超える。
兄と旭も恋人と再会できて幸せそうだし、私たち三人は異世界に来て概ね満足していた。
法整備がされていないことや、国の福祉制度が機能していないことは仕方ないと諦めるしかないだろう。
兄たちは私とリリーさんが練習している間、シルバーとフォレストをブラッシングしていた。
二匹は気持ちよさそうに目を閉じて横たわっている。今日はマッサージまでしてもらったみたいだ。
兄は本当にフォレストが大好きで、時間を作っては構っているのをよく見かける。
フォレストも兄に懐いているようだ。このままテイム魔法を習得しそうな気がする……
シルバーのほうは、旭に付き合ってあげている感がありありとわかる。
以前、旭の手を噛まないように注意はしたけど、お手もお座りも覚えないらしい。
シルバーは狼だからね、犬のようにはいかないと思うよ？　まぁ、頑張って！
リリーさんと扇舞の練習を二時間ほどして、今日は終了。

兄と旭と共にホームの自宅に戻って寝る準備を済ませると、兄たちをテント内に送り返す。
私はホームの自宅で一人きりだけど、無人なので防犯に関しては注意する必要がない。
特に不安を感じることもなく、そのまま就寝した。

金曜日。
冒険者ギルドで素材の換金を済ませたあと、シルバーとフォレストをホームの自宅に帰す。
それから肉屋でファングボア肉を卸し、肉うどん店に寄って、出来上がった腹巻とポンチョを受け取ってきた。
サヨさんたちが編んだポンチョは全て、色や柄などが違っていたため、誰のものか一目でわかるようになっていた。こんなに早く編んでくれるなんて、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。
あとで、何かしらお礼をしなくちゃ。
できれば、もらっても負担にならないようなものが望ましい。
彼女たちはボランティアに参加しただけのつもりだろうからね。
兄たちを車でホーム内の居酒屋に送り届け、私はシルバーとフォレストを連れてお散歩に出かけた。
今週あった出来事を話しながら田舎道を歩いていく。

明日は二つの町を回ってプレゼントを渡すので、一緒に遊んであげられなくてごめんね。
ホーム内で仲良くお留守番してちょうだい。
本当は町の子供たちにも二匹のことを紹介したかったんだけど、町ごとに従魔登録をしないと魔物は中に入れない。明日登録しようにも時間が足りないと思い、断念したのだ。
ただ、久し振りに二匹ものんびりとできるだろう。
それからフォレストには「あなたはゴールデンタイガーになるのよ！」と言い聞かせておいた。
先輩のシルバーから進化の仕方を教えてもらえば大丈夫。
日曜日は教会の炊き出し後に皆で劇をする話も、二匹に伝える。
前回のことがあるので今から不安でいっぱいになってしまう。
皆、暴走しないで台本通り忠実に演じてくれますように。
一時間ほど二匹と散歩を楽しんで、ホームの自宅に戻る。
今日も冷蔵庫に貼(は)られたホワイトボードを見て、時間通りに兄たちを迎えに行った。

第二章　子供たちへのプレゼント

土曜日、朝七時。
今日は予定が盛り沢山なので、昨夜飲みに行った兄と旭を朝早くから起こしに行く。
久し振りに恋人と過ごしたわけだし一緒に寝ていると思うけど、遠慮なく叩き起こすわよ！
寝室に入ると案の定、旭が兄のベッドで眠っていた。まぁ幸せそうな顔しちゃって。
ダンジョン内で別々のテントで寝るのは、やっぱり寂(さび)しかったのかしら？
いつもなら二人を起こさないよう静かに退散するんだけど、今日はそうもいかない。
もう一緒に寝ていることはバレているんだし。
「お兄ちゃん、旭、起きて！」
私は定番のやり方、すなわち布団(ふとん)を引っぱがす形で二人を起こす。
最初に兄が寝ぼけ眼(まなこ)で私を見てから、視線を左に向けて旭を確認する。
そして朝から盛大なため息をついたかと思うと、旭の頭を叩いた！
まぁ！　恋人になんて乱暴な起こし方をするのかしら？

「痛たっ！」
叩かれた旭は頭を押さえ、ビックリして飛び起きる。
「あれ？　沙良ちゃんおはよう。もしかして俺を叩いたのは沙良ちゃん？」
やだわ、私のせいにしないでよ。
「お兄ちゃんが旭の頭を叩いて強引に起こしたのよ？　肩をゆするとか、もっと優しい方法でしてあげればいいのにね～。昨日、喧嘩でもしたの？」
「あ～、それは多分……」
旭が口の中でごにょごにょ言っているけど、聞いている時間がないので二人を急かした。
「今日は時間がないから、さくさく行動するわよ。すぐに出かける準備をして家に来てね。朝食は簡単に食べられるサンドイッチだから」
私はそう言って部屋を出ると、自分の支度を始める。
今日の服装は、新調したブラウスに黒のパンツスタイルだ。
いつもの古着姿じゃない、B級冒険者として相応しい新品の服に着替えて台所に行く。
あとはもう挟むだけにしておいた具材を使ってミックスサンドを三人分作り、コーヒーを淹れたところで兄たちがやってきた。
二人も新調した服に着替えてきたので、子供たちからきちんと稼いでいる冒険者として見てもらえることだろう。
兄は全身グレーでまとめ、旭は明るい緑色の服を選んだようだ。それぞれとてもよく似合っている。
服を新調して正解だった。いつまでも古着じゃ格好つかないものね。
ツナと胡瓜、ハムとチーズとレタス、厚焼き玉子の三種類のサンドイッチを食べて、私たちは冒険者ギルド付近にホームで転移した。
この世界のお店は、どこも大抵朝八時から営業を開始する。ちなみに、営業終了は夕方五時だ。
これには町中に街灯がないことも関係しているんだろうな。日が落ちたら、外は月明かりしかないから。
対して、冒険者ギルドや商業ギルドは二十四時間営業。
顧客のニーズに対応しているところは流石だよね。
両方ともかなりの額のお金が動く場所だから、時は金なりを実践していると言えよう。
働く職員は大変そうだけど……二交代制なのかしら？
冒険者ギルドを首になったオリーさんから依頼を受けた、あの三人組の冒険者のことが気になる。
先日の扇舞の練習のあと、アマンダさんとダンクさんのパーティーのテントにそれぞれお邪魔し

立ち読みサンプル
はここまで